



第 109 回例会 特別講演会

2023. **11/5** (日) 14:00~
札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北8西3)

『カティンの森のヤニナ
独ソ戦の闇に消えた女性飛行士』
小林文乃 (著) 河出書房新社 2023.3



1936
Janina Lewandowska

私が書きたかったのは、女性が職業を持つことさえ難しかった時代に、空に憧れてパイロットになり、自分が選んだ道を精いっぱい生きた1人の女性がいたということです(著者インタビューより*)

小林文乃氏ご来札！ トークショーへご招待

特別ゲスト 富田武 成蹊大学名誉教授

どなたでもご参加いただけます。入場無料、定員50人

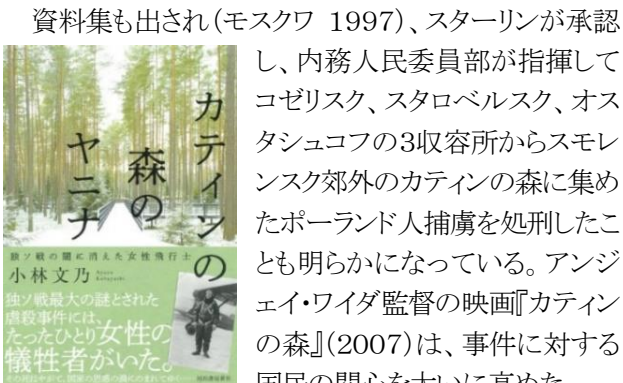
申込み(推奨)・問合せ先(安藤) 080-4071-0956, hokkaidopolandca@gmail.com

助成： ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

後援： 北海道大学
スラブ・ユーラシア
研究センター

新刊
紹介

1940年春に起きた「カティンの森事件」は、ポーランド軍将校ら約2万人が殺害された事件として知られる。当初はドイツ軍の仕業と見做されていたが、ソ連保安機関によるものとの認識が広がり、1990年4月にはペレストロイカ期のソ連が自らの犯罪と認めるに至った。



資料集も出され(モスクワ 1997)、スターリンが承認し、内務人民委員部が指揮してコゼリスク、スタロベルスク、オスタシュコフの3収容所からスモレンスク郊外のカティンの森に集めたポーランド人捕虜を処刑したことも明らかになっている。アンジェイ・ワイダ監督の映画『カティンの森』(2007)は、事件に対する国民の関心を大いに高めた。

しかし、処刑されたポーランド人の中にただ一人女性が含まれていたことは、まったく知られていなかった。実は生き残りの証言があり、彼女の故郷では、英国で1975年に出版された本のコピーが回し読みされ(統一労働者党=共産党の支配下)少しずつ知られていた。彼女が何者であるかについては、カティン博物館でしか分かっていなかった。著者の小林はそれをザヴォドニーの『消えた将校たち～カティンの森虐殺事件』で知ったという。

探求熱心な小林は2019年6月カティン博物館映像コーナーで、その女性がヤニナ・レヴァンドフスカという、ポーランドの名高い将軍の娘であり、自らも飛行士だったことを知った。

ところが、ポーランド人自身がレヴァンドフスカのことを知らない。小林はオシフィエンチム(アウシュヴィッツ)を訪問し、ついでグダニスクの「第二次世界大戦

博物館」で、ヤニナには妹アグネシュカがいて、姉はカティンの森でソ連軍に、2カ月後に妹はパルミリの森でドイツ軍によって処刑されたことを知った。

ついで訪ねたポズナンはヤニナの父のムシニツキ将軍と縁が深く、彼が第一次世界大戦直後にドイツ軍残党を追い出した蜂起の指導者だったことも判明した。ヤニナはここで、当時のヨーロッパでの飛行ブーム(アレクシエーヴィチも『戦争は女の顔をしていない』で言及)の中で、女性としては珍しくパイロットになった。小林はポズナン郊外のムシニツキの故郷ルソーフオヤ、2021年にはパルミリの森にも出向いている。

こうして小林はジャーナリスト、ルポライターらしい取材によって「カティンの森」事件に関する日本人の知見を大きく広げてくれたばかりでなく、18世紀末のロシア、ドイツ(プロイセン)、オーストリアによる分割以降のポーランド史の、ヒロイン一家にかかわる重要な出来事にも言及している。軍人ではムシニツキの同僚で独立回復の英雄ユゼフ・ピウスツキ、ムシニツキの部下でポーランド軍団を率いて第二次大戦で活躍したアンデルスが登場する。ヤニナの果たせなかった夢は、ポーランド人パイロットからなる「第303コシチュシコ戦闘機中隊」の対独戦で実を結んだとも言える(コシチュシコはポーランド第二次分割に抵抗した英雄)。史実の羅列ではない「物語としての歴史」である。

久しぶりにワクワクしながら読んだ本だ。札幌でのイベントを楽しみにしている。
(富田武)